

## 翻訳

## カミーロ・カステロ・ブランコ著『リスボンの謎』（1）

—「まえがき」から第一之書、第1章まで—

尾 河 直 哉

## 〈解説〉

チリ出身の映画監督ラウル・ルイス (Raul Ruiz、一九四一年—二〇一一年) の『ミステリーズ 運命のリスボン』を観た（二〇一二年十一月まで「銀座シネ・スイッチ」で公開）。ラウル・ルイスの監督作品は『見出された時——「失われた時を」とめて』でその素晴らしい映像世界をすでに堪能していたので、今回の作品にも大いに期待した。四時間二六分に及ぶ長尺であるにもかかわらず最後まで緊張感を失うことがなかった。華麗にして見事なフィルム。期待にたがわぬ傑作である。フランスではじつに一年間の超ロングランになったという（映画のゴンクール賞といわれるルイ・ドリュック賞を初めとして、数々の賞を総なめになっている）。テレビ映画化もされた。

映画の原作が十九世紀ポルトガルの文豪カミーロ・カステロ・ブランコ (Camilo Castelo Branco) が一八五四年に発表した長編小説 *Mistérios de Lisboa* (『リスボンの謎』) であることを知った。出自の謎に包まれたひとりの孤児を中心に綾なす複雑にして壮大な人間関係。その謎解き。近代化へ向かって走り始めた激動のポルトガル史を背景に孤児の出自が語られてゆく。なんと魅力的な物語だろう。原作をぜひ自分の手で日本語に移してみたい。訳者が急遽ここに翻訳を開始する所以である。

訳者はすでにジョルジュ・アマード著『ドナ・フロールとふたりの夫』の翻訳を開始し、経済学部の『流通経済大学論集』に（1）から（3）までを掲載している（二〇一二年、四七巻、第一号、第二号、第三号）。しかし、翻訳の緊急性に鑑み、アマ

ドの翻訳は一時中断し、今後しばらくこの『リスボンの謎』の翻訳に一意専心努めることにしたい。

本来なら翻訳に先立ち、カミーロ・カステロ・ブランコの略伝やポルトガル文学における位置、また『リスボンの謎』の意義等を詳しく書くべきだろう。しかし、急遽開始した翻訳であり、著者や書誌についてはいまだ情報が不足している。翻訳の進むなかでいずれまとめて詳しく紹介するつもりである。とはいえ、ひとまずのアウトラインだけはここにごく簡単に記しておきたい。

カミーロ・カステロ・ブランコは一八二五年にリスボンで生まれた。下級男爵であった父マヌエルが召使女に産ませた庶子である。『リスボンの謎』の主人公ジョアンのように、母親をよく知らず（カミーロが二歳になる前に失っている）、父親も十歳で失って孤児のような少年時代を過ごした。十六歳で結婚。四人の子をもうけ、コインブラ大学に学ぶ。若いころは過激な反体制派で、当時の市民革命にも参加している。二十歳のときに作家デビュー。『リスボンの謎』は一八五四年だから、作家二十九歳のときの作品である。当時の文学界はロマン派と写実主義が角逐する時代だった。ポルトガルロマン主義の第一人者であったカステロ・ブランコはロマン派の立場から論争にかかわったが、晩年には写実主義を受け入れたという。一八九〇年に梅毒による失明を苦にしてピストル自殺。バルザックにも匹敵する多作家で（「ポルトガルのバルザック」と言われることもある）、その作

品数は生涯で二六〇編にも及んでいる。

邦訳されたカミーロ・カステロ・ブランコ作品はいまのところ『破滅の恋』一冊だけである（小川尚克訳、彩流社、二〇一一年）。この〈解説〉も本書の「訳者あとがき」に一部負っている。『破滅の恋』はポルトガル文学史上最も愛された小説と言われ、名匠マノエル・ド・オリヴェイラ監督が映画化もしている。カステロ・ブランコの作品はウィキペディアに列挙された主要なものだけでも六十数編を数える。まさにこれから邦訳紹介が待たれる作家と言ってよいかもしれない。

『リスボンの秘密』は第一之書から第四之書に分かれ、発表当時はこの四書が三巻に収まって刊行された。全集版でもこの形を踏襲し、三巻本になっている（第一巻が第一之書と第二之書の途中まで、第二巻が第二之書の途中から第四章の途中まで、第三巻が第四之書の途中から最後まで）。全集版で総ページ八〇〇頁以上にわたるかなりの長編である。これから各字部の紀要に分割掲載してゆきたい。今回の掲載分である『リスボンの謎』（一）は、「まえがき」から第二之書の第一章までを収めている。

翻訳にはカミーロ・カステロ・ブランコ全集（*Obras completas de Camilo Castelo Branco*, publicadas sob a direcção de Justino Meneses de Almeida, estudos bibliográficos, fixação de texto e anotações, PARCEIRA A. M. PEREIRA, LDA, LISBOA, 1969, XLII, XLIII, XLIV）を用い、仏訳（*Mystères de Lisbonne*, traduit

du portugais par Carlos Saboga et Eva Bacelar, Michel LAFON, 2011) を適宜参照した。

# 〔翻訳〕

## リスボンの謎

### まえがき

小説を書くという試みは、他意のない気持ちからやってきます。言い訳がましく仰々しいタイトルをつけられ、失笑を買うことにもなりましょう。使い古された古色蒼然たる言葉を一書の扉にかかげて、さも個性的な名付け親をもったように吹聴するなど、読者のみなさん、それこそ詐欺行為であって、わたしのよく成し得るところではありません。

この小説はわたしの息子でもなければ、名付け子でもないのです。

リスボンの隠された生態を描きたいという誘惑にたとえ襲われたとしても、たった二章すらでっちあげられなかったでしょう。わたしがリスボンについて知ることなど、そこらの町や村の広場にたむろする人々の噂話とさして変わりないのですから。それでは小説の名誉に値しません。わたしが想像力をもっていたとして

も、その源泉を、わざわざ名誉なき任務のために浪費などするでしょうか。しかも、こうした想像力の源泉がなければ、なにひとつ秘密をもたない土地の秘密など書くことはできないと思っていました。たとえその秘密をでっちあげたところで、だれも信じてはくれないだろうと。

わたしは思い違いをしていました。リスボンがどういうところか知らなかったのです。あるいは人間の想像力がもつ潜在的な力が理解できなかったからかもしれません。幻想世界の地平はピレネー山脈で終わっていて、イベリア半島の人間でありながら小説家であることなど不可能だと考えていました。クーパーやシュエにあらずんば小説家にあらずと。もともと、そう考えていたところで悲しい思いをしたことなど一度もありませんでした。それどころか、以前は、<sup>まこと</sup>真実の人の国に生まれて良かったとさえ思っていました。というのも、オノレ・デュルフェのかの名高い『アストレ』からラマルチヌのめそめそ泣いてばかりいる『ジョスラン』に至るまで、小説とは次から次へと嘘ばかりだからです。おまえもいよいよ嘘に絡め取られようとしているわけだ。用心深い読者諸賢はそうおっしゃるでしょう。

とんでもありません。この小説は、作り話ではなく、苦悩の記録だからです。嘘も偽りもない、お読みいただければなるほどと納得していただける苦悩の記録なのです。

読者のみなさん、そこで以下に引く手紙をぜひお読みください。

一八五二年八月二四日に受け取った手紙です。

一八五二年七月二九日、リオデジャネイロ

友よ、

こんなに分厚い紙束を手にしてさぞや驚いていることだろう！しかし、きみがどんな宝物を手しているか知ったら、その驚きが関心に変わるだろうと期待している。

めんどろな挨拶は抜きという。

一年前、ひとりの男がここに降り立った。このぼくが見逃すはずはない。ぼくが昔から大の夢想家だったことはご存じだと思う。今でもこの崇高な属性を認めないわけにはいかないし、会計士という職務と詩人の霊妙な直観のあいだに折り合いをつけなければならぬことがぼくにとってどれほど苦痛か、きみにもわかってもらえるだろう！ただ、こんな暴力を押しつけられたおかげで、ぼくの詩集に誤った詩句が増えたとしても、自慢じやないが、出納簿に間違いがひとつとしてないことだけは断言できる。つまり、ぼくはへぼ詩人だが、まずまずの帳簿係というわけだ。本題に入ろう。ぼくが夢想家であることを知っているきみは、その男をぼくの想像の産物だと思っているかもしれない。いやちがう。根拠がある。きみにもそれを知ってもらいたい。

その男は、この地が世界中から引き寄せたあらゆる人物のなか

でもひととき奇妙な人物だった。背は高からず低からず。顔は痩せている。それどころか骨と皮ばかりの骸骨だ。眼光鋭く、その光からは悪意が顕れることもあれば、燃え盛る極端な情熱が漏れ出ることもある。黒く濃い髭が青銅色の肌をさらに暗くし、黒っぽいショートコートがシャツの白さまで隠している。手足は極端に細くて、痩せた身体つきというか、華奢な身体がその肉のこけた顔と絶妙に釣り合っている。

船から降り立つと、男は埠頭のステップを一段昇って立ち止まり、腕組みをして広大な海をじっと見つめた。

そのポーズを取った男を見ているうちに、ぼくはついうつとりとしてしまった。なぜだ、と下種なやつらは問うだろう。やつらにはきみから答えてやってくれ。物質世界にも長く暮らしていれば、<sup>スリヤアル</sup>霊的な瞬間があるものだ。

こうして深く瞑想に耽った男を眺めているうちに、男に近づいて間近に観察できるように思えてきた。

そしてじっさいにそうできた。男はぼくの存在に気づきもしなかったからだ。梱を担いだ黒人の身体が軽くぶつかって、男は数歩脇に移動したが、それでも水平線から眼を離さない。ぼくもその方向を見てみた。なにも見えなかった。きつとあの男の本当の目は魂のなかにあったのだろう。顔に開いている眼が見ていたものは、ぼくの眼が見ていたものとおそらく同じだったと思う。

この男にどれほど魅了されたかわかってもらえらるだろうか？

ぼくはあの沈黙と謎のなかで宙づりになったまま、長いあいだ、自分が商人だということさえ忘れていた！ そのとき、記憶にちらつとよみがえつてきた情景がある。嫌々帳簿係になるまえ、ぼくは社交界に出入りしていた。そこに、ある種の女たちがいたことを思い出したんだ。ある種の男たちを眼の前にとすると、それだけでもうめろめろになってしまう女たちだよ。あの女たちのことは許してやらなきゃと思った。だって、もしぼくが女で、あんな男のそばにいたら、口説き文句なんかひと言も聞かされなくて、きつと首つ丈になっていたからね。

ばかばかしいと思うか？ まあ、どう思おうときみの勝手だが、これは嘘じゃない。

この状態はすいぶん長く続いた。夢遊病者はやつと目覚めたが、目覚めてからもまだ半ば眠っているようだったよ。海に背を向けると、地面を見つめたまま埠頭に沿ってゆつくりと歩いていった。ぼくも男の後に随いていった。

男は何か思いついたようにふと立ち止まった。振り返ると、やってきた水夫を呼び止め、荷物をもつてくるように言いつけた。水夫は、荷物検査をしているはずの税関検査官たちを指差した。船客だった男は、そのひとりに礼儀正しく声をかけると、革製の大型旅行鞆の南京錠を開け、衣類を数枚両手で捧げるように取り出すと、パスポートを見せてから引き下がった。

それからぼくはその男の後に随いていったよ。きみに随いてい

くようにね。兄貴に泊まる場所を提供したがっている弟。さながらそんな感じだった。

男は百歩ほど行くと、誰かを探そうように横を向いた。そのとききつとぼくと眼が遭ったのだと思う。

ぼくにまず会釈をすると、こう尋ねてきた。

「申し訳ありませんが、中心街から遠い宿をどこかご存じないでしょうか？」

「あまりないと思います」とぼくは答えた。「どこでも同じでしょうが、ここでも宿の常連さんは商用でいらつしやる方々ばかりで、できるだけ商業センターに近いところに投宿しようとするものですから」

気が急いでいて、ぼくには男の返事が遅く感じられたよ。だって、わかってもらえないかなあ。ぼくがどんなにこの男のそばから離れたくなかったか！ なにしろその魅力ときたら！

「それじゃあ」と男は言った。「恐縮ですが、いちばん近い宿をお教えいただけませんか？」

「いちばん近いのでしたらこちらです」と言つて、ぼくは自分の家を指した。

すると男は同意してうなずくと、おべっかと礼を述べ、お借りする部屋で少し休んでいきませんかと言った。

ぼくたちは階段を昇った。男がドアのひとつをあんまり強く叩くもんで、思わず頬が緩んでしまったよ。下男はぼくの指示を

待っていたようだが、ぼくが指示を出すより先に、わが宿泊客が自分で部屋を頼んでしまった。

リビングに入ると、男が勧めてくれる椅子に座り、男にも坐ってもらおうとソファを指差した。男はまず腰かけ、しばらくすると背を凭せかけ、ついには東洋人のように優雅に寝そべった。

「煙草は？」 葉巻入れを開けながら男は言った。

「やります」と応えて、下男に火を持ってこさせようとしていると、謎の男は口ウソクで葉巻に火をつけ、紛れもないトルコ人の姿勢にまた戻った。

「ここにお泊まりの客は」と男は言った。「ポルトガルのホテルにはない上品さを味わっていらっしやいますね。あちらのホテルはただ上辺が派手なだけで。このリビングなんか、さながら裕福な子爵夫人の閨房アタラシですよ」

機知に富んだこの種の言い回しを聞くと、見栄っ張りなぼくらはだれでもつい顔を綻ばせてしまうものだが、男はこの言葉を、葉巻を口の端にくわえたまま、自らのエスプリを鼻にかけるそぶりもなくすんなり言っただけだ。

いっぽうぼくの方はやにやにしているだけ。男の言葉に負けない気の利いた言葉を返せるとはとも思えなかったからね。

「ブラジルへは初めてですか？」とぼくは尋ねた。

「初めてです」

「ご旅行で？」

「いや。ここはわたし向きの土地ですから」

この言葉は、ヴィクトル・ユゴーの芝居で幕切れに発される最後の科白のように見事だった。数語のなかに哲学がつまっていると思つたよ。不幸からやつてくる男だけの深い哲学が。チャタトン<sup>①</sup>の言葉を思い出した。腹の足しにも慰めにもならないのになんで書くのかと訊かれて答えた言葉だ。覚えているか？ たしかこうだった。《必要だから書くのです》

「長くいらつしゃるおつもりですか？」とぼくは訊いた。

「好奇心を満たしてさしあげられず、残念です」

この返事にぼくは赤面したよ。男の顔を見たが、表情に変化はなかった。厳しく冷たく哀しい、そしてどこか人を見下したような表情だ。ますます謎を深めるこの男に、ぼくはすっかり心を奪われていた。

ぼくは立ち上がった。いちばん近いドアを開け、そのドアを示して、どことなくごちなさに凝こもる声で言った。

「滞在が短くても長くても、リビングはここにございます。寝室は書庫のすぐ脇です。わたしを弟とでもお思いになって、この家すべてを自分の住まいとしてお使いください」

紳士はぼくの手を握ると、妙に冷たい態度でこう言った。

「ご厚意にはなるべく甘えないようにしたいと存じます。わたしは迷惑な客です。話をするでも、人を楽しませるでもない。老人のように邪魔くさくて。ご高配に感謝して部屋に引っ込んでい



ます…」

こう言って出て行こうとしたが、ドアを開けるのにちよつとした努力が必要だったので、よんどころなくもういちど腰かけてもらうことになった。

「この部屋を退出なる前に」とぼくは言った。「宿泊にあたつての条件をお話しさせてください。わたしは独り者で、下男が二人食事と睡眠をこの家ですべております。そちらさまもここではおひとり下男二人と暮らしているとお考えください。何日か経つてここでお暮らしになるのおつらいようでしたら、お引き取りになつてかまいません。泊める代わりに話し相手になれなどとは申しません。わたしも口数が少なく、考えているときの方が多いいのですから。しかも、仕事で帳簿つけをしている以外、しゃべる時間も考える時間もほとんどありませんし。この条件でよろしいですか？」

「けっこうです」

短くそう言つたあと、男はふたたびわたしの手を握り、はじめと同じあの打ち解けた姿勢にもどつた。ぼくはリビングを出ると、下男に指示を与え、仕事にもどつた。

ぼくは夕食の時間に帰宅した。指示したとおり客人は夕食を済ませていた。そこで一杯のコーヒー、ふた匙のマルメロジャム、四杯のコンヤックに招くことができた。

男には挨拶だけにとどめたが、深い哀しみが見て取れた。どう

やら午前中は書庫にいたようだ。

テーブルで一緒に話をしようと思を掛けてくれなかつた期待もした。かけてくれなかつたよ。で、こちらからも声はかけなかつた。数日休んだところで、どこか別の家を紹介するがどうかと尋ねてみた。恐縮だがそうしていただけるとありがたいと男は答えた。

事態は微妙な状況にあると思つた。男の苦しみには神聖な謎として立ち入らなかつた。好奇心を露わにするような言葉は厳に慎んだから、二度と赤面するようなことにはならなかつた。

数日して、どこか郊外に引きこもりたいと男が言つてきた。会社のボスがボタフォゴ<sup>(2)</sup>にすてきな土地をもっているの、そこはどうかと勧めてみた。受け入れてくれたよ。

男のところにはいくどか訪ねた。かわいそうなほど老け込んでいた。胸が苦しいと訴えてね。ポルトガルに帰つたらどうかとも言つてみた。男は微笑んで、木立のあいまに白く輝く墓地の十字架を指差したよ。

男はいつたいただれなんだ——そう訊きたいんだろう？

そのときはぼくにもわからなかつた。

七か月後。ぼくらの祖国ポルトガルでは夏の太陽に焼かれた木の葉が落ち始めるころだ。男に肺結核の兆候がはっきり見えてきた。

そのときぼくは、男がはじめて微笑むところを眼にした。男はぼくの腕を取るとふたりで庭を散歩した。

すると男がこんなことを言うんだ。

「正体を明かさず、わたしは恩知らずでした」

「恩知らずだなんて、そんなことはありません！」

「いや、恩知らずでした。謎のベールは友情の手が取るべきだった。でも、大きな恩義に報いようにも、持ち上げた手はほら、ごらんのとおりがりがりです。黄熱が黒熱と合流したがっているらしい。この衝突が原因でわたしはじき死ぬでしょう。そうしたらわたしの部屋にいらしてくださいませんか。ご面倒をおかけしますが、お手隙のときに部屋にある原稿を読んでいただければ、あなたの宿泊客がだれだったかわかりになります。生きているときは無口でしたが、墓に入ったらたくさんお話させていただきます」

そう言つて男は立ち去った。男はこの言葉を微笑みで始めて、すすり泣きで終えたよ。巨木は呻いたんだ。斃れる直前に。

そして斃れた。

黄熱がほとんど消えかかっていた火を吹き消した。ぼくは断末魔の苦しみにあえぐ男の姿を目にした。永訣の言葉は耳にできなかったよ。ぼくもまた病の床に伏していて、これが死の床になると思っていたからね。

部屋の鍵は、瀕死の男からの指示で、司祭がわたしにくれた。同封の書類が、男から預かったものだ。最後の章を読んでくれれば、なぜこんなことをしたのかわかってもらえると思う。さよ

うなら。自分を不幸呼ばわりしないでくれよ。神が、あるいは悪魔があの男に用意した不幸にくらべれば、だれの不幸だってその名に値しないのだから。きみの心の友F。

友人がわたしに言ったように、今度はわたしがなかば読者諸賢に申し上げましょう。最終章でこの伝記を出版した理由がわかりになると。

## 第二之書

### 第一章

わたしは十四歳の少年だった。そして自分がだれなのか知らなかった。

神父ひとり、神父のご令妹だというご婦人ひとり、寮生二十人と一緒に暮らしていた。

寮生のなかには世間ずれしたのがいて、おまえは神父の息子じゃないのかと訊いてくることがあった。でも、どう答えてよいものかわからなかった。

神父はとても高潔な人物に見えたが、だからといって、わたしがその息子であつておかしいわけではない。

神父が豎琴の伴奏で痛恨の唄を歌ったところを耳にしたことは



ない。だが、堅琴をもたないダヴィデなど、厳密に言って語義矛盾ではないだろうか? 「先生! みんな先生が多くの父親ではないか訊いてきます。ちがうっていいですか? しつこくつきまとわれるの、いやなんです」そんな厚かましいことをいくども口にしたくなった。

だが、実際に口にしたことはいちどもない。だが父親であるか知らなくても、生きてゆくうえではさしてこまらなことがわかっていたからだ。

瞑想に耽りがちだったわたしは、いくども空を仰ぎ、小鳥が飛ぶのを眺めては思ったものだ。「だれが多くのお父さんか、神さまがお造りになったあの生き物に訊いてくる人はいないだろうか? 空を裂いて、なんて高く飛んでいるだろう! 空をまるまる独り占めだ。なんて自由! だれにもわずらわされずに!

ああ、多くの心もあのツバメのようだったら! あんなふうには飛びまわって、この広い世界を独り占めできるのに。高く、高く、高く飛んで神さまのところまで行けたら、お父さんにだって会えるんじゃないか? 下界がちっちゃく見えるだろうなあ!…」

子どものばかげた夢想だったかもしれない。でも当時のわたしはそう考えていたし、いつまでも揺りかごのなかでうとうととしていたい、子どものころ揺りかごのそばでいちども味わったことのない優しい愛撫を取り戻したい、そう思っていた。

わたしのこうした無益な夢想をしじゅうかき乱していたのが当

の神父であった。わたしはラテン語にも、論理学にも、読書にも科学にもうんざりしていた。燕がわたしの理想だったが、燕はラテン語なんか知らない。ティトウス・リウイウス<sup>③</sup>のページをめくりながら、うんざりしてわたしは思った。「これがなんの役に立つというんだ? こんなものに人生の大半を費やす必要があるのだろうか? むなしの大言壮語に膨大な時間を費やし、けっきょく人ひとり変わることもないではないか。体に蠢く第六感さえ発見できないのだから」

もちろん、当時こんな言葉で考えていたわけではない。だが、社会から教わった言葉——それがありがたいとも思わないが——をひとまず脇に措けば、考えていた内容はほぼこんなところである。

しかし、神父はそう考えてはいなかった。わたしに勉強を強いた。もし慈しみが父性の顕われなら、わたしが先生の息子だなんてだれひとりとして考えなかったはずだ。なにしろわたしには休日も、散歩も、ご褒美も、称賛も与えられなかったのだから。わたしはまるで不可触<sup>パ</sup>賤民<sup>ア</sup>だった。神父の、先生の、みんなの私生児だった。

ところが神父の哀れな妹はわたしを、お兄さまの愛弟子と称していた。勝手な理屈を並べたて、あげくのはてには得々として、あなたの財産は学問です、先生から学問を授ければ授かるほどあなたは感謝する理由が増えるんですよ、などと言ったものだ。

納得できなかった。でも、神父の妹が哀れな人だということだけは、そのころの知性でも苦もなく理解できた。

悶々とするような問題じゃありません。燕は空の原を駆け抜け、夕方になると、明日の食事を思い煩うことなく眠りにつくじゃないですか。

こんな説明をすると、お人好しのドナ・アントーニアは泣いた。この涙もろい女は、なにかというすぐに涙をこぼした。まだ世間というものを知らなかったのだろう：少なくともわたしにはそう見えた。

だが、燕だけでこの狂おしい好奇心が慰められたわけではない。わたしは自分がだれだか知りたかった。貴種だと思ったことはない。そもそもそんな幻想などもちようがなかった。どこかに家族がいると思わせてくれるような資金援助も、励ましの言葉も、ひそかな贈り物もないのに、どうやって自分を貴種だと思えよう。そんな幻想など、着ている粗末な上着を見ればたちまち吹き飛んでしまう。

思い出してみても貧窮の証拠にはこと欠かなかったから、卑しい生まれじゃないかとよく考えていた。そして、そこに一抹の詩情さえ纏わせた。ずいぶん悲しい詩情だったが、わたしの性格にはぴったりだった。

自分は靴屋の息子だろうか？ 街角で猫を見つめるように神父が拾ってきたのだろうか？ それとも処刑された泥棒かなにかの

息子で、神父がむりやり連れてきたのか？

こんな問いがわたしの心を苛み始めた。だれかに答えてもらいたかった。

おまえは靴屋の息子だと。

おまえは捨て子だ、泥のなかから慈悲の手によってすくわれたのだと。

泥棒の子だと：それにしても、父親を絞首刑にした首つり役人がまだ生きているなら、絞首台の立っていた広場を通り過ぎる人たちがつぶやく姓を使えないのはなぜなんだ？

靴屋の息子でも一国の首相になれるかもしれない。捨て子でも優しい父親にならないともかぎらない。泥棒のせがれが泥棒に容赦のない裁判官になることだってあるだろう。

せんないことをあれこれ思い描いて疲れたときには、こうして父親を知らない息子でも世界じゅうに知られる人間になれるかもしれないと考えては気を取り直し、安んじて眠りについたものだ。こうして物思いに耽っていると、よくささいなことに気がついた。たとえば、寮生たちはだれもが四つ、五つ、六つ、ときにはそれ以上の名字をもっている。

ところがわたしはただのジョアンだった。

そこで寮生たちはわたしの名前を呼ぶとき、からかうような発音をした。いかにもうんざりしたような平板な声で、音節が終わるごとに滑稽な説明を加え、名前の形ばかりか、その色合いまで

くすませようとした。

こうしたくだらない冗談にわたしは笑った。しかし、その笑い顔の下ではまさに「潸然<sup>さんぜん</sup>として涙を落としていた」のである。

あるとき神父にこっそり訴えたこともあった。だが、神父からは厳しい叱咤が返ってきた。おまえは慢心している、傲慢だ、尊大だと。自尊心という鉄が大きく切り取って残り少なくなった心の布地に、神父はさらに格言風の譬えを詰め込み、わたしには場違いとは思えない聖句をいくつか引きながら説教をしめくつた。

神父の説教はおそらく最良の部類に属していたと思う。だが、今度はわたしの精神の方が、祝福されたその穀粒を受け取れなかった。クラスメートと教師にたいする軽蔑から生まれた棘が、それを阻んでいたからだ。

神父の令妹はときどきふたりの年老いたご婦人の訪問を受けていたが、そのふたりと一緒に若い女性がひとりやってきていた。これから少しその女性のことを描いてみよう。というのも、高貴な生まれにちがいないとわたしはじめて直感できた人物だったからである。

わたしはたったひとり、裏庭のブナの木陰に隠れていた。老婦人と若い女性がわたしを見つけ、やってきた。若い女性は興味深そうに正面からわたしを見るとアントーニアさんに言った。

「この子、なんだかとても悲しそうよ!…」

こんな注目をされて、わたしは驚いた。いつも腰かけている石のベンチから立ち上がると、新兵のように背筋を伸ばして、なんとも田舎くさいお辞儀をした。

「それにお行儀のよいこと!」老婦人のひとりが言うと、手をわたしの頭に置いた。

もうひとりが訊いた。

「ぼっちゃん、日曜日のご家族のところにお戻りにならないの?」

「家族なんかいません」とわたしは答えた。普段の自分には似つかわしくない敏捷さだった。そのころずっと頭から離れなかった問題にばったり出くわしたからである。培われた悲しみが原因で、感覚がいわば雄弁になっていたのだ。

「ほんとうにご家族いらつしやらないの?」と若い女性が訊き返した。

わたしは黙ってしまった。

涙が零れ落ちそうになった。だがこのとき、ブナの木のあいだで小鳥がさえずり、慰めてくれた。

そして燕のことを思い出した。

「アントーニアさん、言ってくださらなかったから!…」

「そうよ!」他の二人が声をそろえて言った。

「この子のことはそれ以上知らなくて…本人だけじゃないんですよ。わたしにも知らされていないんです。この子の出生のこ

と……」

こうしてドナ・アントーニアは口ごもりながら客人たちが示した最初の好奇心を満足させると、続いて現れそうなふたつめの好奇心を巧みに避けた。

若い女性はわたしを矯めつ眇めつ眺めると、まるで手相占いで出生の謎解きをするかのように、わたしの手足をじろじろ見た。そしておばたちの方を振り返ると鋭い口調で言った。

「あのか細い手足、ごらんさいよ……」

「あらほんとうね！」と老婦人たちは大きな声をあげたが、こんな詮索は一刻も早くやめてもらいたいと思っているドナ・アントーニアだけはなにも言わなかった。

「ちがうの！」と、謎解きに夢中の若い女性は言い返した。「間違いないわ。この子、下層民の子じゃないわよ！」

「どうして？」と神父の妹は驚いた顔で尋ねた。

「あの手足、見えないの？ 下層民の子どもたちがあんな手足して生まれてくることなんてないもの」

「イザベリーニヤ、あんたはいつも下層民のこと悪く言うわね！」母親だらうかおばだらうか、老婦人が咎めた。「みんな神さまの子で、みんな手足もっているのよ」

「それはそうだけど」その身分の高い上品な女性は口調を和らげて応えた。「でも、人は足でお里が知れるって言うでしょ。それに、四頭立ての四輪馬車に乗ってたって、ドアに手さえ見えれば、そ

れが仕立て屋の息子かどうか言える自信あるわよ、わたし」

「そりゃあなた、ちよつと言い過ぎっていうもんだよ！」と、おばは最大限の善良さを発揮して応えた。

でもわたしにはそのイザベラの高慢さがなぜか好ましく思えた。イザベラの話を知っているのが嬉しかった。そして、わたしのなかに高貴な人間の徴をもつと見つけてもらいたかった。

紋章入りの緞帳が屋内の戸口に吊るしてあるような高貴な家の生まれに憧れる以前、わたしは靴屋や処刑された泥棒が父親でもいいと思っていたが、もしこれが浅ましいことだったら、まだほんの子どもだったことに免じて許していただきたい。

くだんの家族は帰って行った。

わたしは自分の手足をじつと見つめながらそこに立ち尽くした。

〈第一之書第二章に続く〉

(1) 十八世紀イギリスの詩人。中世詩を贗作して高い評価を得たが、貧困のなか、十七歳の若さで自殺した。

(2) リオデジャネイロにある地区

(3) 古代ローマの歴史家『ローマ建国史』を著す。

(4) イザベルの愛称。